

0.1 はじめに

本章ではプラズマの**流体モデル** (Fluid Model) によるモデル化を進める．流体モデルは一般に以下の3つの方程式及び Maxwell 方程式に基礎を置く．

1. 密度連続の式
2. 運動方程式
3. エネルギー方程式

流体モデルはプラズマの集団的・巨視的な振る舞いの理解に役立つ．

0.2 密度連続の式

プラズマの存在する空間内に、閉曲面 S を考え、その体積を V とする．体積中の粒子の総数 N を考える．密度を n とする．粒子 (数) 密度の連続の式は

$$\frac{\partial n}{\partial t} + \nabla \cdot (n\mathbf{u}) = 0 \quad (0.2.1)$$

である．ここで、 \mathbf{u} はプラズマの流れの平均速度ベクトルである．粒子の生成あるは消滅がある場合は生成消滅項 S_i を右辺に加える¹．

$$\frac{\partial n}{\partial t} + \nabla \cdot (n\mathbf{u}) = S_i \quad (0.2.2)$$

また、質量密度の連続の式は

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \nabla \cdot (\rho\mathbf{u}) = 0 \quad (0.2.3)$$

である．

場の考え方に慣れるために、波形を保ったまま、一定速度で海岸に打ち寄せる波を例に考える．簡単のために1次元とし $\rho(x, t)$ 、流体の速度は空間的、時間的に変化しないとする $u_x = \text{const.}$ ²．これらを粒子密度の連続の式に代入すると、

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + u_x \frac{\partial \rho}{\partial x} = 0 \quad (0.2.4)$$

が得られる．**図 0.2.4** の解は

$$\rho(x, t) = \rho(x - u_x t) = \text{const.} \quad (0.2.5)$$

である．これは波形を保ったまま、 x 方向に伝わる波を表している．**図 0.2.4** の第1項は固定した位置における密度の時間変化、第2項は流体の対流による密度の変化を表している．つまり、生成・消滅がないとき、空間の各点での密度変化は流体の対流による流入・流出によって生じる．

また、波の頂点にいる観測者から見ると、

$$\frac{d\rho}{dt} = 0 \quad (0.2.6)$$

なので、

$$\frac{d\rho}{dt} = \frac{\partial \rho}{\partial t} + u_x \frac{\partial \rho}{\partial x} = 0 \quad (0.2.7)$$

つまり、

$$\left[\frac{\partial}{\partial t} + u_x \frac{\partial}{\partial x} \right] \rho = 0 \quad (0.2.8)$$

¹ $S_i > 0$ で生成、 $S_i < 0$ で消滅．

² 一般的には空間と時間に依存する．

である。この、

$$\frac{d}{dt} = \frac{\partial}{\partial t} + u_x \frac{\partial}{\partial x} \quad (0.2.9)$$

を対流微分 (Convective Derivative) という。
より一般的には、

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \nabla \cdot (\rho \mathbf{u}) = 0 \quad (0.2.10)$$

である。ここで、非圧縮性流体 $\nabla \cdot \mathbf{u} = 0$ を考えると、

$$\nabla \cdot (\rho \mathbf{u}) = \mathbf{u} \cdot \nabla \rho \quad (0.2.11)$$

よって、

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \mathbf{u} \cdot \nabla \rho = 0 \quad (0.2.12)$$

である。

また、次節では以下の **Euler 方程式** を導出する。

$$m n \left[\frac{\partial}{\partial t} + (\mathbf{u} \cdot \nabla) \right] \mathbf{u} = n q (\mathbf{E} + \mathbf{u} \times \mathbf{B}) - \nabla p \quad (0.2.13)$$

また、対流微分は

$$\frac{D}{Dt} = \frac{\partial}{\partial t} + \mathbf{u} \cdot \nabla \quad (0.2.14)$$

とも書かれる。

0.3 流体の運動方程式

粒子 1 個当たりの運動量は $m\mathbf{u}$ である。単位体積当たりの運動量は $n m \mathbf{u}$ である。ここで、粒子の質量を m 、粒子の数密度を n とする。体積 V に含まれる粒子が持つ全体の運動量 \mathbf{M} は $\mathbf{M} = \int_V n m \mathbf{u} dV$ である。

\mathbf{M} の時間変化を考える。時間変化に寄与するのは、(1) 外力による運動量の変化 (2) 面 S を通しての流体の流入・流出 (3) 面 S を介して、面の外側の流体が及ぼす圧力、がある。

0.3.1 外力による運動量の時間変化

位置 \mathbf{r} 時刻 t において流体粒子 1 個あたりに働く力を $\mathbf{f}^{\text{ext}}(\mathbf{r}, t)$ とする³。体積 V 全体に働く力は、流体密度を $n(\mathbf{r}, t)$ とすると、 $\int_V n(\mathbf{r}, t) \mathbf{f}^{\text{ext}}(\mathbf{r}, t) dV$ である。よって、 \mathbf{M} の時間変化は、

$$\frac{\partial \mathbf{M}}{\partial t} = \int_V \frac{\partial}{\partial t} (n m \mathbf{u}) dV = \int_V n(\mathbf{r}, t) \mathbf{f}^{\text{ext}}(\mathbf{r}, t) dV \quad (0.3.1)$$

である。したがって、この式が恒等的に成り立つのは

$$\frac{\partial}{\partial t} (n m \mathbf{u}) = n \mathbf{f}^{\text{ext}} \quad (0.3.2)$$

が満たされるときである。密度が時間的に変化しない時、

$$\frac{\partial}{\partial t} (m \mathbf{u}(\mathbf{u}, t)) = \mathbf{f}^{\text{ext}}(\mathbf{r}, t) \quad (0.3.3)$$

である。

³例： $\mathbf{f}^{\text{ext}}(\mathbf{r}, t) = q[\mathbf{E} + \mathbf{v} \times \mathbf{B}]$

0.3.2 運動量の流入・流出

体積 V 中の粒子総数 N の時間変化を考える．

$$\frac{\partial N}{\partial t} = \int_S n\mathbf{u} \cdot d\mathbf{S} \quad (0.3.4)$$

である．ここで， $\mathbf{\Gamma} = n\mathbf{u}$ を**粒子束密度** (Particle Flux Density) という．表面を通しての運動量の流入・流出は， $(m\mathbf{u})(n\mathbf{u} \cdot d\mathbf{S})$ である．したがって， \mathbf{M} の時間変化は，

$$\frac{\partial \mathbf{M}}{\partial t} = - \int_S (m\mathbf{u})(n\mathbf{u} \cdot d\mathbf{S}) \quad (0.3.5)$$

である．左辺は $\int_V \frac{\partial}{\partial t}(nm\mathbf{u}) dV$ と書けるので， x 成分で考えると，Gauss の定理を使うと，

$$\int_V \left[\frac{\partial}{\partial t}(mnu_x) + \nabla \cdot (mnu_x \mathbf{u}) \right] dV = 0 \quad (0.3.6)$$

である．よって，各成分は

$$\frac{\partial}{\partial t}(mnu_x) + \nabla \cdot (mnu_x \mathbf{u}) = 0 \quad (0.3.7)$$

$$\frac{\partial}{\partial t}(mnu_y) + \nabla \cdot (mnu_y \mathbf{u}) = 0 \quad (0.3.8)$$

$$\frac{\partial}{\partial t}(mnu_z) + \nabla \cdot (mnu_z \mathbf{u}) = 0 \quad (0.3.9)$$

である．ここで $\nabla \cdot (mnu_x \mathbf{u})$ の物理的意味を考察する．右辺に移項すると，

$$\frac{\partial}{\partial t}(mnu_x) = -\nabla \cdot (mnu_x \mathbf{u}) \quad (0.3.10)$$

と書けるので， $-\nabla \cdot (mnu_x \mathbf{u})$ は，流体の単位体積当たりに働く力に相当する．さらにベクトル解析の公式を用いて展開すると，

$$\nabla \cdot (mnu_x \mathbf{u}) = \frac{\partial}{\partial x}(mnu_x u_x) + \frac{\partial}{\partial y}(mnu_x u_y) + \frac{\partial}{\partial z}(mnu_x u_z) \quad (0.3.11)$$

となる．ここで，**運動量流速密度** (Momentum Flux Density) を $P_{ij} = mnu_i u_j$ を用いると，

$$\nabla \cdot (mnu_x \mathbf{u}) = \frac{\partial}{\partial x} P_{xx} + \frac{\partial}{\partial y} P_{xy} + \frac{\partial}{\partial z} P_{xz} \quad (0.3.12)$$

と書ける⁴．

次に， $P_{xy}, P_{xz}, \frac{\partial P_{xy}}{\partial y}, \frac{\partial P_{xz}}{\partial z}$ の物理的意味を考えよう．

⁴ $P_{xx} = mnu_x u_x = (mu_x)(nu_x)$ と書けるので，これは単位時間に x 軸に垂直な単位面積を横切る x 方向の運動量を表している．また， $\frac{\partial P_{xx}}{\partial x} \left[\frac{\text{N}}{\text{m}^3} \right]$ は流体の単位体積当たりに働く力に相当する．